長生きを喜べる長寿社会の実現

～生きがいのある高齢者を増やす～

公益財団法人長寿科学振興財団
The Japan Foundation for Aging and Health

長寿科学の振興を通じ、生きがいがあり、長生きを喜べる長寿社会を実現してまいります。

理事長挨拶

大島 伸一

理事長を務めることになり、皆様方に御挨拶を申し上げるとともに、あらためて、長寿科学振興財団に求められるもの、私の役割とは何かについて考えてみました。当財団が発足したのは平成元年で、ナショナルセンターである国立長寿医療センター（当時）の設立を想定して、それを支援するための財団として設立されたものと理解しています。

来るべき高齢社会に向け、どのような問題・課題が生じるのか、それに対しどのように対応してゆけばよいのか、国としてすでに準備を進めていたものであり、現在の日本、世界の状況を考えると、諸先輩方の慧眼に驚かされます。六番目のナショナルセンターとして国立長寿医療センターが設立されたのは平成16年で、常陸宮殿下妃殿下、厚生労働大臣、愛知県知事らをお迎えして開設記念式典が催されました。初代の総長として選任された私が、当財団と深く関係するようになったのはこの時からです。

国立長寿医療センターは、平成22年に独立行政法人となりましたが、今でも国立の名称が残っているように、国民のためにというセンターの使命は変わらず、政策医療への提言などを主要な使命としていることに変わりはありません。因みに、現在の正式の名称は、平成27年から国立研究開発法人国立長寿医療研究センターとなっています。ナショナルセンターの独立行政法人化とともに、財団と国立長寿医療研究センターの関係は法的には変わりましたが、両者が協力して高齢問題に取り組むという使命や目的は変わっていないと考えています。

すさまじい勢いで高齢化の進んでいる我が国で、財団に求められていることは何か。認知症とかフレイルなど、老化とともに進展する人の肉体的、精神的変化をはじめ、高齢者が増えることにより生ずる社会の変化、生活の変化にどう対応してゆけばよいか、人類が経験したことがなく、どこにも答えのないこれらの問いにどう財団は立ち向かえばよいのか。

東日本大震災や豪雨による水害等では、多くの高齢者が亡くなりました。高齢になれば虚弱化するといえばそれまでですが、自力で生活できないという意味では、高齢者よりも乳幼児の方がはっきりしています。乳幼児の場合は、親と共に生活していることもありますが、親が必死になって守ります。老々・独居が当たり前の居住形態では、高齢者を守るのはますます難しくなるでしょう。

また、新型コロナウイルス感染症の流行でも死者で圧倒的に多いのは高齢者でした。諸外国ではICU等での救命機器の使用の優先度を決めなくてはならないなどといった事態まで生じているようですが、そのような時に高年齢という要因がどのように評価されるのか。高齢者にとって安全で住みやすい高齢社会とはどんな社会なんだろうかと考えざるを得ません。

私は「長生きを喜べる社会」という言葉が好きでこれまでにも何度も使わせてもらっていますが、この言葉は、小泉純一郎元首相が二期目の所信表明演説で使用された言葉です。小泉元首相は「長生きを喜べる社会」とはどんな社会なのか、その時もその後も詳しく触れることなく政権を終え、私には不満でしたが、実際にはその答えは当時も今も誰も解っていないというのが正解でしょう。

日本に生まれ育ち、そして老い死んでゆく、より多くの方が人生を終えるときに、いろいろあったが「長生きしてよかった」と言えるような社会とはどんな社会なのか。当財団がその答えの一端でも示すことに貢献できればと思っています。よろしくお願い申し上げます。

長寿科学

長寿科学は、長生きを喜べる長寿社会づくりの基盤となる学問です。

老化メカニズム（人はなぜ老いるのか）の解明、高齢者特有の疾病の原因解明と予防・診断・治療、さらに高齢者の社会的・心理的問題の研究等、高齢者や長寿社会に関し、自然科学から人文社会科学に至るまでの幅広い分野を総合的・学際的に研究する学問を「長寿科学」と呼びます。

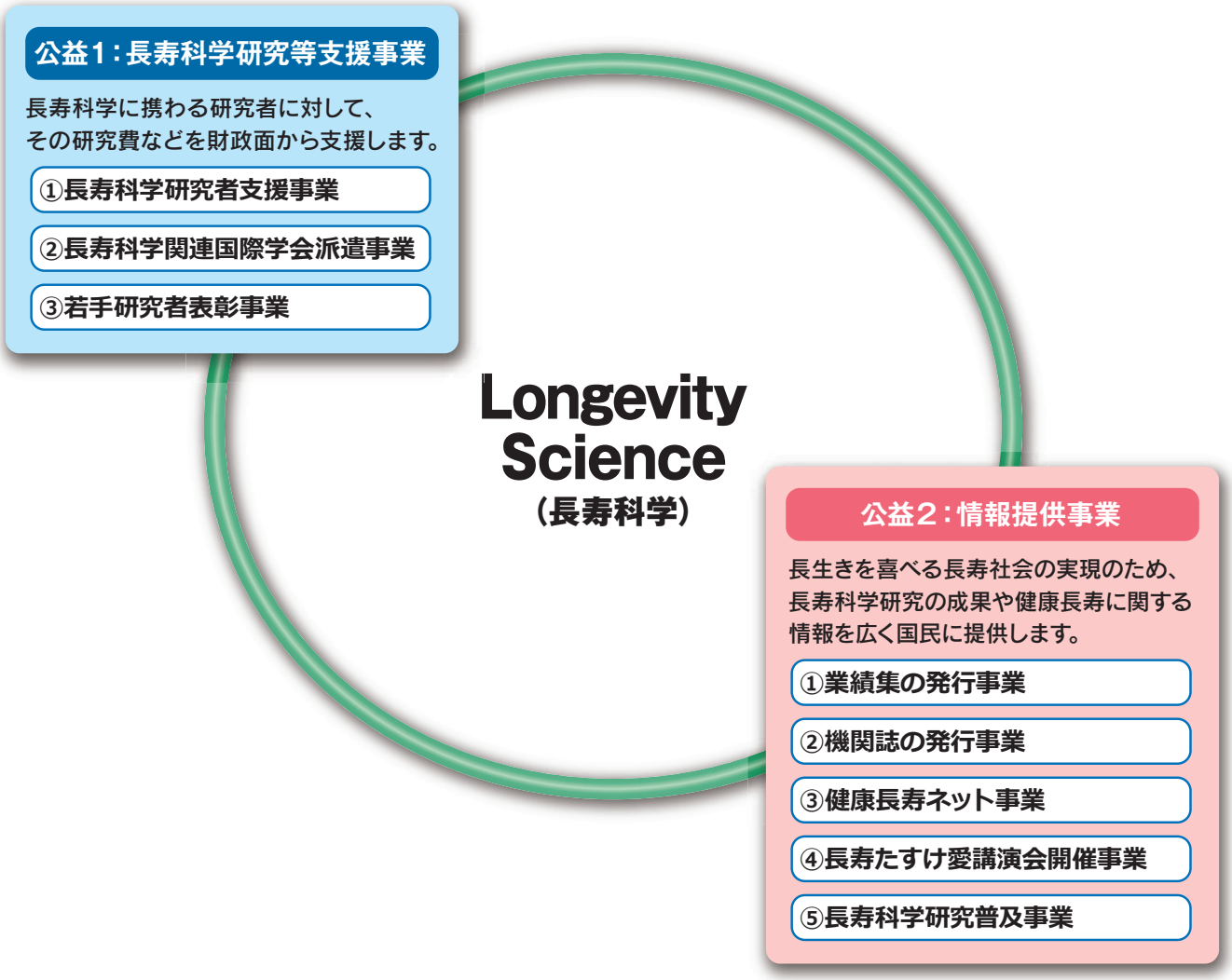
財団ビジョン

長生きを喜べる長寿社会の実現～生きがいのある高齢者を増やす～

当財団では、長生きを喜べる・生きがいのある人生とするための課題解決となる研究開発・社会実装を行い、政策提言に向けた事業を実施します。人生100年時代において、ひとりひとりが最期まで生きがいのある心豊かな人生を送ることができる社会の実現を目指します。

事業

財団ビジョン実現のため、長寿科学に関する2つの公益事業（研究の助長奨励・研究成果の普及）を展開しています。



① 長寿科学研究者支援事業

長生きを喜べる長寿社会実現研究支援

財団ビジョン「長生きを喜べる長寿社会実現～生きがいのある高齢者を増やす～」を実現するため、これを主課題として掲げるとともに、課題解決となる4つのキーワードを設け、基礎的な研究開発から本格的な社会実装まで取り組む課題解決型プロジェクトを採択し、支援します。確実に社会実装し、持続可能な事業化を重視するとともに、社会貢献、地域貢献となるプロジェクトを支援します。

採択プロジェクト

貢献寿命延伸への挑戦！
～高齢者が活躍するスマートコミュニティの社会実装～

●プロジェクト代表者：檜山 敦
（一橋大学大学院　ソーシャル・データサイエンス研究科・教授）
●研究期間：3年
●助成総額：90,000,000円（予定）

地域の中で役割や居場所を探す高齢者と、仕事やボランティア、生涯学習など様々な地域活動また、サポートを求める住民の声を有機的につなぐ情報プラットフォームとしてGBER（ジーバー）を研究開発し地域での社会実装に取り組んでいます。
本プロジェクトでは、GBERの機能を拡充し、各地域から抽出されたニーズを総合して、高齢者の活躍・貢献領域を拡大することを目指しています。

ユニバーサル・フレンドリ・ファシリティが認知症の人と地域住民の社会参加向上とスティグマ軽減、ウェルビーイング向上にもたらす効果検証

●プロジェクト代表者：斎藤 民
（国立長寿医療研究センター老年社会科学研究部・部長）
●研究期間：2年
●助成総額：20,000,000円（予定）

産官学民の連携により、認知症などで社会生活機能に低下のある人々や地域住民が自然に参加したくなる施設を作り出すことで、認知症への偏見を減らし、誰もが幸福で健康に過ごせる社会を目指しています。

長生きを喜べる高齢社会課題解決研究および社会実装活動への助成採択プロジェクト社会実現研究支援

Googleの慈善事業部門であるGoogle.orgの支援を受け、高齢者のデジタルデバイド解消、デジタル技術を用いて地域コミュニティーの創出や高齢者ボランティアの育成・雇用創出等に取り組む、大学、研究機関、自治体等を支援します。

採択プロジェクト

高齢者のスマートフォン利用促進を介したアクティブコミュニティーの形成

●プロジェクト代表者：島田　裕之
（国立長寿医療研究センター老年学・社会科学研究センター・センター長）
●研究期間：2年
●助成総額：49,998,000円（予定）

“学び合い”プログラムを用いたデジタルスキルラーニング・エコシステムの開発と実装～多世代型互助によるスマート・インクルージョンの実現～

●プロジェクト代表者：瀧　靖之
（東北大学加齢医学研究所・教授）
●研究期間：2年
●助成総額：50,000,000円（予定）

「ジョブボラ」の創出とデジタルマッチングの実装に向けた研究：誰もが活躍できる社会を目指して

●プロジェクト代表者：村山　洋史
（東京都健康長寿医療センター研究所社会参加とヘルシーエイジング研究チーム・副部長
●研究期間：2年
●助成総額：50,000,000円（予定）

② 長寿科学関連国際学会派遣事業

長寿科学研究に携わる若手研究者の育成を目的に、優れた研究成果をあげた若手研究者又は有望な研究を行う若手研究者に、海外で開催される関連する学会に参加するため（1人20万円　10人程度）助成します。

③ 若手研究者表彰事業

長寿科学研究に携わる若手研究者の研究活動を幅広く支援することにより若手研究者の育成と長寿科学の振興を図ることを目的として、優れた研究成果をあげた研究者を選考のうえ、「長寿科学賞」を贈呈するとともに、副賞として研究費（100万円）を交付します。

公益2 情報提供事業

① 業績集の発行事業

長寿科学研究の学術的研究の中で、社会のニーズに合ったテーマ2を定め、平成10年から医療従事者向けに編集した研究マニュアルを業績集として発行。平成30年度以降の業績集を当財団HPにて公開しています。

※令和3年度から財団事業の見直しのため、本事業は休止しています。

② 機関誌の発行事業

WEB版機関誌「Aging＆Health（エイジングアンドヘルス）」を財団ホームページと健康長寿ネットで年に4回（春・夏・秋・冬）発信しています。令和6年度は109号～112号を公開予定。

主な内容

- 長寿に関わる研究について専門家が分かりやすく解説
  テーマ
  - 109号：認知症の治療・予防・早期発見
  - 110号：暮らすだけで健康になれるまちづくり
  - 111号：高齢者の食事と栄養
  - 112号：高齢者の生活を支える
- ご高齢になっても活躍されている著名人へのインタビュー
- 各界のキーパーソンとの理事長対談
- 各地域で高齢者に関わる取り組みを紹介
- 長寿科学に関する最新研究情報
- エッセイ　　など

③ 健康長寿ネット事業

厚生労働省の助成を受けて、高齢期を前向きに生活するために必要な情報を提供し、日本の健康長寿社会の発展に貢献する目的で作られたWEBサイトです。疾病、老化、介護予防や健康づくりなど、健康長寿に関する情報を提供しています。

主な内容

- 健康長寿とは：自分でできる健康長寿のための情報について
- 高齢者の病気：高齢者に多い病気・症状について
- 高齢者を支える制度とサービス：介護保険制度や利用できるサービスなどを紹介
- インタビュー・対談・特集・研究情報：機関誌で取り上げた記事を紹介
- エッセイ：機関誌で取り上げたエッセイに加え、健康長寿ネットだけの連載エッセイを紹介

④ 長寿たすけ愛講演会開催事業

明るく活力のある長寿社会の構築を参加者と共に考え、毎日の生活の中でできる介護予防や健康づくりを目的に、各都道府県や公共団体と共同して全国各地で講演会を開催します。平成17年度から令和元年までに37か所で開催しました。

※令和3年度から財団事業の見直しのため、本事業は休止しています。

⑤ 長寿科学研究普及事業

国立研究開発法人国立長寿医療研究センターとの連携により、毎年テーマを定め、長寿科学研究に関する国際シンポジウムを開催します。

- **令和6年度テーマ：Digital Healthcare:Bridging Health,Medicine and Welfare**
  デジタルヘルスケア：健康、医療、福祉の橋渡し

長寿科学振興財団の設立

政府は、平成元年12月に「高齢者保健福祉推進十か年戦略ゴールドプラン」を打ち出しました。この十か年戦略において、かねてより昭和天皇御長寿御在位60年慶祝事業の一環として検討されていた「国立長寿医療研究センター」の設置及び「長寿科学振興財団」の設立推進の方針が決定され、同年、当財団が設立されました。

●高齢者保健福祉推進十か年戦略（抜粋）「６長寿科学研究推進十か年事業」

（１）研究基盤充実のための国立長寿医療研究センターを設置するとともに、長寿科学研究を支援する財団を設立する。

（２）基礎分野から予防法・治療法の開発、看護・介護分野、更に社会科学分野までの総合的な長寿科学に関するプロジェクト研究を実施する。

（３）これらにあわせて、将来の高齢化社会を担う児童が健やかに生まれ、育つための施策を推進することとし、とりわけ、生涯の健康の基礎となる母子保健医療対策の一層の充実について中長期的視野に立って検討する。

ロゴマークの由来

当財団は、昭和天皇御長寿御在位60年慶祝事業のひとつとして設立されました。また、昭和天皇の一周年祭に当たり、天皇陛下、皇太后陛下から、長寿科学研究推進に資する思し召しにより、昭和天皇の御遺産から当財団に対して御下賜金が賜与されました。
こうした経緯から、昭和天皇の宮中での御印が「若竹」でありましたことに因み、いつまでもみずみずしく若々しい心を象徴するものとして平成9年に作成されました。

組　　織

●組織図

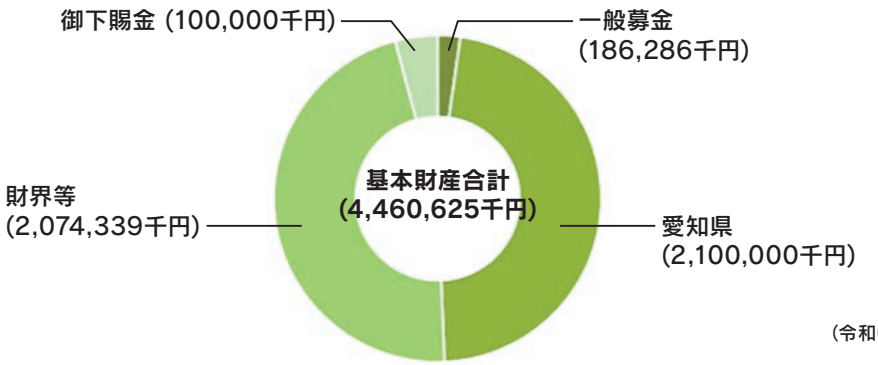
評議員会

理事会 ― 会長 ― 理事長 ― 事務局長 ― 事務局次長 ― 総務企画課／事業推進課

●推進体制

会長 ― 理事長 ― 長寿科学研究者支援事業審査評価委員会／高齢社会課題解決研究助成審査評価委員会／長寿科学関連国際学会派遣事業審査委員会／広報委員会

基本財産造成状況



（令和6年3月31日現在）

沿　　革

平成元年12月	**・政府は長寿科学研究推進事業として、センターの設立・支援財団の設置等を決定** **・財団法人長寿科学振興財団設立** **・初代会長　　鈴木　永二** **・初代理事長　佐分利　輝彦　就任** ・政府は「高齢者保健福祉推進十か年戦略」（ゴールドプラン）を策定
平成2年1月	**・昭和天皇1周年祭に当たり、天皇・皇太后陛下より昭和天皇の御遺産から御下賜金の賜与**
平成2年4月	・長寿科学研究センター創設準備室発足
平成6年12月	・政府は、現行の「高齢者保健福祉推進十か年戦略」を全面的に見直し 「新ゴールドプラン」を策定して、高齢者の介護対策の更なる充実を図ることとした
平成7年6月	**・二代会長　永野　健　就任**
平成7年7月	・長寿医療研究センター運営開始
平成9年10月	**・財団本部を、あいち健康の森健康科学総合センター内へ移転** **・旧本部は、東京事務所に組織変更**
平成10年10月	**・財団設立10周年記念式典挙行**
平成11年12月	・政府は高齢者保健福祉施策の一層の充実を図るため、「ゴールドプラン21」を新たに策定
平成12年1月	**・二代理事長　大谷　藤郎　就任**
平成12年3月	**・国民的アイドルであった故成田きんさんの御遺族より、小渕総理大臣を通して御寄附を受納**
平成13年4月	**・三代会長　奥田　碩　就任** **・天皇陛下より、香淳皇后の御遺産から御下賜金の賜与** ・政府は、「メディカル・フロンティア戦略」をスタート
平成15年10月	**・三代理事長　小林　秀資　就任**
平成16年3月	・国立高度専門医療センター（ナショナルセンター）として、国立長寿医療センター開設
平成17年4月	・「健康メディカル・フロンティア戦略」がスタート
平成18年6月	**・四代会長　柴田　昌治　就任**
平成19年4月	・「新健康フロンティア戦略」がスタート
平成22年3月	**・四代理事長　祖父江　逸郎　就任**
平成22年6月	**・五代会長　渡辺　捷昭　就任**
平成23年3月	**・東京事務所を本部へ統合**
平成23年4月	**・公益財団法人へ移行**
平成27年1月	・「認知症施策推進総合戦略～認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて～（新オレンジプラン）」策定
平成28年6月	・「ニッポン一億総活躍プラン」閣議決定
平成29年1月	・日本老年学会、日本老年医学会　高齢者の定義を「75歳以上」に見直す提言
令和元年12月	**・財団設立30周年記念式典挙行**
令和2年7月	**・五代理事長　大島　伸一　就任** **・名誉理事長　祖父江　逸郎　就任**
令和3年4月	・高年齢者雇用安定法の改正（70歳までの就業機会の確保）
令和5年6月	・「認知症基本法」の成立（認知症の人を含めた国民一人一人がその個性と能力を十分に発揮し、相互に人格と個性を尊重しつつ支え合いながら共生する活力ある社会（＝共生社会）の実現を推進）

評議員名簿

令和6年6月18日現在

（50音順）

秋山　弘子	東京大学名誉教授
大熊　由紀子	国際医療福祉大学大学院教授
伍藤　忠春	社会福祉法人全国心身障害児福祉財団理事長
鳥羽　研二	東京都健康長寿医療センター理事長
藤宗　和香	アズビル株式会社社外取締役
本田　麻由美	読売新聞東京本社編集局医療部編集委員
柵木　充明	公益社団法人愛知県医師会会長
樂木　宏実	独立行政法人労働者健康安全機構大阪ろうさい病院総長

評議員　計8名

役員名簿

令和6年6月18日現在

（50音順）

会長	非常勤	渡辺　捷昭	公益財団法人長寿科学振興財団会長
理事長	〃	大島　伸一	国立長寿医療研究センター名誉総長
理事	〃	荒井　秀典	国立長寿医療研究センター理事長
〃	〃	井口　昭久	愛知淑徳大学名誉教授
〃	〃	井藤　英喜	東京都健康長寿医療センター名誉理事長
〃	〃	江澤　和彦	公益社団法人日本医師会常任理事
〃	〃	大内　尉義	国家公務員共済組合連合会虎の門病院顧問
〃	〃	加賀美　幸子	千葉市男女共同参画センター名誉館長
〃	〃	児玉　善郎	日本福祉大学学事顧問
〃	〃	齋藤　英彦	国立病院機構名古屋医療センター名誉院長
〃	〃	佐藤　眞一	大阪大学名誉教授
〃	〃	清水　肇子	公益財団法人さわやか福祉財団理事長
〃	〃	鈴木　みずえ	浜松医科大学臨床看護学講座教授
〃	〃	田代　俊孝	仁愛大学学長
〃	〃	辻　哲夫	東京大学高齢社会総合研究機構 未来ビジョン研究センター客員研究員
〃	〃	濵口　道成	先進的研究開発戦略センター（SCARDA）センター長 科学技術振興機構（JST）顧問
〃	〃	松本　一年	愛知県西尾保健所長
〃	〃	柳澤　信夫	一般財団法人全日本労働福祉協会会長

理事　計18名

監事	非常勤	岩田　義浩	サッポロホールディングス株式会社　顧問
〃	〃	遠島　敏行	公認会計士　税理士

監事　2名

長寿科学関連の専門委員で構成する各委員会を設置し、公益目的事業を推進しています。

長寿科学研究者支援事業審査評価委員会　委員名簿

令和6年4月1日現在

（50音順）

委員長	駒村　康平	慶應義塾大学経済学部教授
副委員長	飯島　勝矢	東京大学高齢社会総合研究機構機構長 未来ビジョン研究センター教授
委員	秋下　雅弘	東京都健康長寿医療センターセンター長
委員	阿久津　靖子	一般社団法人日本次世代型先進高齢社会研究機構代表理事
委員	鎌田　実	一般財団法人日本自動車研究所代表理事・研究所長 東京大学名誉教授
委員	近藤　克則	千葉大学予防医学センター特任教授 一般財団法人医療経済研究・社会保険福祉協会 医療経済研究機構研究部長
委員	佐藤　久恵	国際基督教大学評議員
委員	長谷川　友紀	東邦大学医学部教授

委員　計8名

高齢社会課題解決研究および社会実装活動への助成審査評価委員会　委員名簿

令和6年4月1日現在

（50音順）

委員長	荒井　秀典	国立長寿医療研究センター理事長
副委員長	葛谷　雅文	名鉄病院病院長
委員	大高　洋平	藤田医科大学医学部リハビリテーション医学講座主任教授
委員	篠崎　尚史	国立長寿医療研究センター理事長特任補佐
委員	鈴木　みずえ	浜松医科大学臨床看護学講座教授

委員　計5名

長寿科学関連国際学会派遣事業審査委員会　委員名簿

令和6年4月1日現在

（50音順）

委員長	荒井　秀典	国立長寿医療研究センター理事長
委員	秋下　雅弘	東京都健康長寿医療センターセンター長
委員	石神　昭人	東京都健康長寿医療センター研究所副所長
委員	上田　貴之	東京歯科大学 老年歯科補綴学講座教授
委員	亀井　美和子	帝京平成大学薬学部長
委員	斎藤　民	国立長寿医療研究センター 老年学社会科学研究センター部長
委員	真田　弘美	石川県立看護大学学長

委員　計7名

広報委員会　委員名簿

令和6年4月1日現在

（50音順）

委員長	井藤　英喜	東京都健康長寿医療センター名誉理事長
委員	飯島　勝矢	東京大学高齢社会総合研究機構機構長 未来ビジョン研究センター教授
委員	飯野　奈津子	医療福祉ジャーナリスト
委員	櫻井　孝	国立長寿医療研究センター研究所長
委員	佐藤　眞一	大阪大学名誉教授
委員	鳥羽　研二	東京都健康長寿医療センター理事長
委員	柳澤　信夫	一般財団法人全日本労働福祉協会会長

委員　計7名

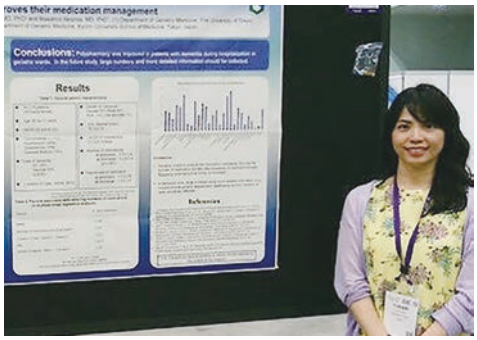
ご寄附のお願い

当財団では皆様から頂いたご寄附を基本財産として積み立て、運用することで得られた利息を原資とし、財団ビジョン「長生きを喜べる長寿社会実現～生きがいのある高齢者を増やす」の実現のため事業活動を行っています。
皆様からの温かいご支援をよろしくお願いします。
なお、ご芳名を当財団ホームページ及びWEB版機関誌Aging＆Healthでご紹介させていただいております。

寄附金の使途

- 長寿科学研究に携わる研究者の育成と長寿科学の振興を図ることを目的に、長寿科学に貢献できるすべての分野の活動を幅広く支援しました。
  これまでに161件 6億2,105万円を助成しました。
- 長寿科学研究に携わる若手研究者の育成を目的に、海外で開催される関連学会で研究成果を発表するための渡航費を支援しました。
  これまでに110名総額2,653万円を助成しました。
- 長寿科学研究において優れた研究成果をあげた若手研究者を表彰しました。
  これまでに67名を表彰しました。
- 健康長寿情報や長寿科学研究成果を分かりやすく情報提供します。
  年に4回機関誌を公開（通算108号）
  ウェブサイト「健康長寿ネット」の運営（1,750以上の記事を掲載）

長寿科学研究に携わる若手研究者の育成と長寿科学の振興を図ることを目的として、優れた研究成果をあげた研究者を表彰します。



長寿科学研究に携わる若手研究者の育成を目的に、国内で優れた研究成果をあげた若手研究者を海外で開催される学会において研究成果を発表するための渡航費を助成します。

長寿科学に携わる研究者に研究費の助成を行い、導き出された研究成果を取りまとめ、報告します。

ご寄附の方法

次の3つの方法からお選びください

●銀行振込〈寄附金振込先口座〉
金融機関：三菱UFJ銀行(0005)　大府支店（344）
種別：普通預金　　口座番号：1762379
口座名義：公益財団法人長寿科学振興財団　基本財産受入口　理事長　大島伸一

●郵便振替用紙（振込手数料不要）
当パンフレットに貼付の「郵便振替用紙」（振込手数料不要）をご利用下さい。
ご不明な点などございましたら下記までご連絡下さい。
《連絡先》総務企画課　TEL：0562-84-5411　FAX；0562-84-5414　E-mail：soumu@tyojyu.or.jp

●つながる募金

つながる募金

SoftBankのスマホから
ご利用料金とまとめて寄附

どなたでも可能
クレジットカードで寄附

当財団は、所得税法（所得税関係）、法人税法（法人税関係）および租税特別措置法（相続税関係）上の「特定公益増進法人」です。当財団への寄附金は、寄附金控除、損金算入等についての税法上の特典が受けられます。個人様･法人様いずれの場合も、優遇措置を受けるためには確定申告が必要となります。確定申告の際は、当財団が発行する領収書の提示が必要となります。

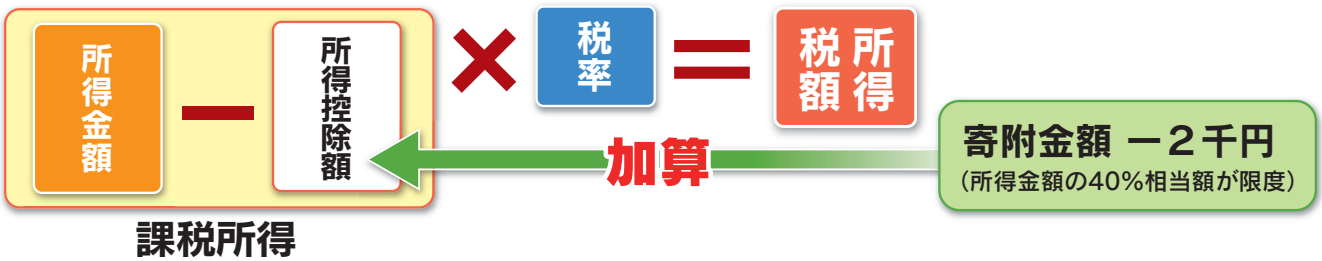
税制上の優遇制度

個人様の場合

○ 1.所得税に関する寄附金税制優遇

支出された寄附金について、（寄附金額※－2千円）の額が所得控除されます。

※寄附金額：国・地方公共団体、他の特定公益増進法人等への寄附金額を含みます。また寄附金額の限度額は所得金額の40%相当です。



所得税の所得控除：所得税額を計算するときに各納税者の個人的事情を加味し、算出された金額が控除される制度です。

○ 2.相続税に関する寄附金税制優遇

相続や遺贈によって取得した財産を寄附した場合、寄附した分の相続税が非課税になります。

法人（民間企業等）様の場合

支出された寄附金のうち、①公益法人への寄附金の特別損金算入限度額と②一般寄附金の損金算入限度額（①の限度額を超えた分を含む）の額を限度として、損金算入すること（損金算入の分だけ課税対象額が減少します）ができます。

最新研究情報

編集
柳澤信夫編集委員長

WEB版機関誌「Aging & Heath(エイジングアンドヘルス)」より抜粋
詳細は財団ホームページをご覧ください。

国内外の新しい長寿科学研究を紹介します。今回の情報は、国立障害者リハビリテーションセンター研究所福祉機器開発部長・井上剛伸氏、東京大学大学院医学系研究科教授・岩坪威氏、国際医療福祉大学医学部糖尿病・代謝・内分泌内科学主任教授・竹本稔氏、東京都健康長寿医療センター研究所福祉と生活ケア研究チーム研究部長・石崎達郎氏、福岡国際医療福祉大学医療学部教授・森望氏から提供いただきました。

ロボットに着替えの介護ができるのか？

介護ロボットがだいぶ実用化されてきたとはいうものの、身体介護を自動で行うロボットはまだ実用化されていない。イギリスのグループは、ハンガーに掛けられた手術用のガウンを取り、ベッドの周りを動きながら、仰向けに寝ているダミー人形の左右の腕に袖を通すロボットを開発した。ポイントは、着せやすいようにガウンの適切な位置を持つこと。柔らかい衣服を扱うのは難しい。シミュレーションを重ねて、ロボットに学習させることにより、問題を解決している。実用にはまだまだの段階ではあるが、一歩一歩進化している(Zhang F, et al., Science Robotics. 2022; 7(65): eabm6010)。(井上)

次のアルツハイマー病治療薬候補ドナネマブ

アルツハイマー病(AD)の原因となるアミロイドβ(Aβ)の脳内蓄積を、抗体を用いて除去する免疫療法の開発が進んでいる。2023年9月には、Aβの重合体であるプロトフィブリルを認識する抗体「レカネマブ」が日本で承認された。これに続き、蓄積後のAβに生じるピログルタミル化修飾を認識する抗体「ドナネマブ」の第3相臨床試験の結果が発表された。試験では、ADの初期症状を有する1,736人にドナネマブまたはプラセボを4週間おきに1年半投与。Aβ蓄積に次いで生じるタウの蓄積が低～中等度の被検者では、ドナネマブにより、認知機能や日常生活機能を評価するiADRSスコアにおいて病気の進行が約35%抑制された。一部の患者で脳浮腫が生じるなど克服すべき課題はあるが、Aβ除去によるADの進行抑制効果が改めて示された(Sims JR, et al., JAMA 2023; 330(6): 512–527)。

(若林・岩坪)

趣味は高齢者の精神を救う：16カ国の研究からの洞察

高齢者の健康には社会的および心理的な問題が影響する。そのため、多くの国で高齢者に趣味を楽しむことを奨励している。ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドンのMak HWらは、世界16か国で趣味と精神的健康の関係を調査した。その結果、趣味の普及率は国によって異なり、スペインの51.0%からデンマークの96.0%まで幅広いが、趣味を持つことは、国や文化の違いを超えて、うつ病の症状を減少させ、幸福感と生活満足度を向上させ、国の平均寿命や幸福度とも関連した。今後も高齢者の心身の健康を向上させるために、各国で趣味の普及を促進すべきだろう(Mak HW, et al., Nat Med. 2023; 29(9): 2233–2240)。

(竹本)

「後期高齢者の質問票」はその12項目でフレイルを識別可能

東京都健康長寿医療センター研究所の堀らは、自治体の健診で使用される「後期高齢者の質問票」の「フレイル関連12項目」を点数化し、至適基準にJ-CHS基準を用いてフレイルの識別能を評価した。その点数は中等度の確からしさ(c統計量：0.79、$p<0.001$)でフレイルを識別可能であり、4点以上の場合に感度55.8%、特異度85.8%でフレイルを識別できることが示された(分析対象者461人のうち4点以上の者は19.5%)(Hori N, et al., Geriatr Gerontol Int. 2023; 23(6): 437–443)。

(石崎)

食と脳：食事制限模倣薬(2-DG)が脳卒中や認知症への抵抗性を高める

カロリー制限や間欠絶食が長寿化や老化制御に効果的と知られて久しい。グルコースに似た2-デオキシグルコース(2-DG)でもその効果が発揮されるが、マウスでそのメカニズムを調べると細胞の中のストレス応答系を刺激していることがわかってきた。その応答系の因子は神経細胞の可塑性応答の主役でもあるニューロトロフィンの活性化にも通じる。過食を抑えることがアルツハイマー病への抵抗性を高め、脳卒中からの回復にも寄与する。その仕組みに細胞のストレス応答系の流れがある。米国のコーネル大学を中心としたグループの共同研究成果だ(Kumar A, et al., Neuron. 2023; S0896–6273(23)00472-5. doi: 10.1016/j.neuron.2023.06.013)。

(森)

全国にある趣深い竹林について情報提供をお願いします！

長寿科学振興財団では、財団のロゴマークの若竹にちなんでパンフレットの表紙に掲載する竹林の情報を集めています。孤高の美しさ、緑の息吹、静寂な風景など、あなたのおススメする竹林についての情報をお寄せください。竹林の名前、所在地、特徴、アクセス方法など、どんな情報でも歓迎です。また、竹林に関連する写真も大歓迎です！情報提供をお待ちしています！採用時には、竹林の場所・自治体等の紹介も併せて掲載いたします。

【連絡先】
長寿科学振興財団 総務企画課 担当
soumu@tyojyu.or.jp

令和６年度財団パンフレット表紙

～ ちたの竹林 ～

愛知県知多市にある旭公園の西隣に位置するこの竹林は長年にわたり、市民団体「竹林をきれいにする会」によって整備されている約200メートにわたる小径です。1年を通して美しい竹林の景観が広がっています。毎年クリスマスにはライトアップイベントも行われ、フォトスポットとしてもおすすめです。

愛知県知多市

愛知県知多市は、知多半島の北西に位置し、名古屋からも中部国際空港からも約３０分とアクセスのよいまちです。

愛知のモノづくりを支える愛知用水の貯水池である佐(そ)布(う)里(り)池周辺には、25品種約6,000本の梅の木が植えられ、県内随一の梅の名所として知られています。２月中旬～３月中旬に開催される佐布里池梅まつりは、一足早い春の訪れを感じようと市内外から多くの観光客で賑わいます。

新舞子にあるマリンパークは、白い砂浜と青い海、緑の芝生が織りなす風景が自慢の海辺のリゾートエリア。２基の風車がトレードマークで名古屋から一番近い海水浴場として人気のスポットです。

江戸時代から「知多木綿」の産地として栄えた岡田地区は、ゆるやかなカーブが続く道沿いに、黒(くろ)板(いた)塀(べい)、なまこ壁の家や蔵など、往時の栄華の名残が街並みに残っています。
他にも、幻の城「大草城」や、だるま寺として知られる「大(だい)興(こう)寺(じ)」、めがねをかけた弘法様が鎮座する「大(だい)智(ち)院(いん)」など、見所がいっぱいの知多市へ、ぜひお越しください。

知多市観光協会

財団HPはこちらからご覧ください。

https://www.tyojyu.or.jp

長寿科学振興財団　検索

QRコードから簡単にアクセスできます

所在地

〈アクセス〉
・ＪＲ名古屋駅からＪＲ東海道本線（上り）「大府駅」下車
・ＪＲ大府駅西口から知多バス大府線・大府循環線に乗車
・「あいち健康プラザ」下車

〒470-2101
愛知県知多郡東浦町大字森岡字源吾山1-1
あいち健康の森健康科学総合センター 4F（あいち健康プラザ内）
TEL:0562-84-5411　FAX:0562-84-5414
E-mail:soumu@tyojyu.or.jp

公益財団法人長寿科学振興財団
令和6年度版